

金曜コラム - 「私たちのヨンミは誰ですか？」

キム・デヒョン(前カーリング代表候補チーム監督、スポーツ市民連帯執行委員)

すでに忘れ去られている 2018 平昌冬季オリンピック。長く記憶される名前がある。「ヨンミ」女性カーリングチームを思い出すと幻聴のように聞こえる名前「ヨンミ?」だ。韓国女子カーリング代表の代表的な選手は、ヨンミではなく、スキップポジションの「キム・ウンジョン」選手だ。カーリング競技では通常、チーム内スキップ選手の姓を取ってチーム名を呼ぶ。だから「チームキム」である。では「ヨンミ」は誰か? チームで最も力強く苦勞して氷を磨かなければならず、目立たないリードポジションを担当する選手だ。カーリングの競技でリードポジションは最初に二個の石を投げ、残りの 3 人の選手が投げる 6 個の石を次々磨かなければならない。強靱な体力と犠牲の精神が必要なポジションだ。キム・ウンジョン選手は試合中、なぜ「ヨンミ」をそんなにも心を焦がして叫んだのだろうか?まさに「ヨンミ」が、他のチームメンバーのストーンの力不足と、間違った方向を正す役割をしたからである。

カーリング技術のうち氷の上を磨く動作をスイーピングというが、大きく 2 つの役割を言う。一つは氷の上の異物を無くして石の進行方向に邪魔にならないよう予防するものであり、もう一つは氷の上にある水滴氷(ペブルと呼ばれる)を拭いてやり、ストーンの速度と直進性を高めるものである。スイープを最も多くするポジションがリードだが、そのポジションの選手がまさにキム・ヨンミ、「ヨンミ」だったのだ。

カーリング競技中にスイーピングが必要な場合、通常は「スイープ~~~!」、「腰~~~!」、「は~~~~い!」と叫ぶ。韓国女性カーリング代表のキム・ウンジョン選手は「ヨンミ、もっと強く磨いて!」、「ヨンミ、もっと内側に磨いてストーンの方向を変えて!」、「ヨンミ、より直線的に来るように力強く磨いて」という様々な意味が込められた「ヨンミ」を叫んだ。その意味を正確に把握したヨンミは身を投げ必死にスイーピングをした。

危機の瞬間、決定的な機会、切迫した瞬間にキム・ウンジョン選手は同じ 2 つの単語「ヨンミ」を叫び、その難しい試合を勝利に導いた。大韓民国国民の心に「ヨンミ」がそうして刻まれたのである。手に汗を握って勝利を応援していた国民に「ヨンミ」は、そのように貴重な勝利をプレゼントした。

私たちは、「ヨンミ」という二つの音節の単語に込められた重い意味を正確に理解したのか?多分正確な意味を知らないでも、ただ幸せだったおぼろげな記憶として思い出しているかも知れない。素晴らしいショットを投げた選手たちの後に、そのショットを生み出すために目立たないところで数百回、数千回黙々と氷を磨いていた「ヨンミ」があった。

昨日発表された青瓦台改造発表を聞きながら、彼らは果たして大韓民国のための「ヨンミ」になってくれるか疑問に思った。もう一つは、私は果たして誰の「ヨンミ」になってあげられるだろうか?早朝にこの質問を自分に投げて答えを出そうと、悶々としている。

01 中央日報 2018.8.27

【「放棄はできなかった」...「冷静だったスプリンター」金クギョンが泣いた】

孤独な疾走。

「韓国陸上短距離の看板」金クギョン（27歳・光州広域市庁）は歴代陸上男子100m韓国記録を5回塗り替えました。2010年31年、これまでの100m韓国記録（10秒34）を10秒23で短縮した金クギョンは2015年光州ユニバーシアードでは、10秒16、昨年は10秒12、10秒07まで縮め、7年間に0.27秒短縮しました。しかし、国内では彼の競争相手がいませんでした。一人で技術を磨きながら達成した彼の成就是今後の韓国陸上の希望と同じでした。

26日、インドネシア・ジャカルタのゲルローラブンカルノスタジアム。2018ジャカルタ・パレンバンアジア大会で陸上男子100m決勝を10秒26でゴールインして8位に入った後、金クギョンはこらえていた涙をこぼしました。彼は「アジア陸上全体が強くなっている。私も強くなろうとするが全体が強くなって実際、力が及ばない。10年近く看板選手として非常に大変だったが…」と話していました。孤独に記録と戦ってきた自分を振り返りながら、普段冷静な彼の涙を見せたのは初めてでした。

気持ちを整えたあと、再び元の場所に立った金クギョンは責任感を強調しました。彼は「私まであきらめてしまう訳にはいかなかった。よくしたかった。しかし努力してもダメなので、それが一番大変だった」と打ち明けました。

それでも金クギョンは再び意味のある記録を出しました。初めてアジア大会陸上100m決勝に上がったのです。彼は「初めての決勝だった。それ自体は意味があったが8位だったので、何を言っても言い訳だ。実力で負けた」と言いました。その一方で彼は「あきらめることはできない」と言いました。彼は「100mは本当に良く平準化された。アジアの100mはより強くなった」とし「もっと努力する。私まで放棄できない」と力説しました。彼は200m、400mリレーなど、残りの試合では、「歯を食いしばる」と誓いました。金クギョンはそのようにもう一度気持ちを切り替えました。

<https://sports.news.naver.com/general/news/read.nhn?oid=025&aid=0002845527>

（訳注：金クギョンは男子200m決勝で20秒59を記録し4位。3位との差は0.04秒だった）

02 毎日経済 2018.8.28 【 不人気種目の悲しみとアジア大会 】

去る8月18日に開幕したジャカルタ・パレンバン夏季アジア大会がいつのまにか大会中盤を越えて終わりに達しています。閉幕式を除けば一週間も残っていません。韓国は中国と日本に次いで総合順位3位です。日本とのメダル差が金が10個を超え、合計30以上の状況で日本を追い抜くのは難しいと思われます。1998年のバンコク大会以来逃さなかった2位の座を日本に渡すことになるわけです。ところが少し残念なのは、国民がこのようなアジア大会にあまり関心がないことです。

かつて国民アジア大会に熱狂した時期がありました。経済的に難しかった60～70年代の代表選手たちのアジア大会善戦とメダル獲得は全国民の関心事でした。オリンピックのメダルは考えることさえできなかった時代、アジア大会は韓国スポーツの優秀性と誇りを感じることができる良い機会でした。北朝鮮とのライバル構図による「南北対決」はまた、人々の注目を集めるイベントでした。

アジア大会の最盛期は1986年ソウル大会でした。韓国で初めて開かれるアジア大会であり、オリンピックの開催を2年後に控えた時期であって国民の関心は最高潮に達し、選手たちの活躍と歓喜と共に熱狂しました。この大会で韓国は期待以上の善戦で史上初めて日本を押さえ、総合順位で中国に次いで2位に上がりま

した。永遠のライバル日本を下したという点で、国民の脳裏に強く残る出来事でした。このすべてが、いわゆる「不人気種目」が悲しみを乗り越えて善戦したおかげでした。

ソウル大会以降もアジア大会はしばらくの間、かなり好調でした。ソウル大会ほどではありませんでしたが、「チーム 코리아」は安定した成績を出して善戦し、アジア大会は4年ごとにスポーツ強国という自負心を自覚させてくれる原動力でした。

「韓国善戦」という言葉が少し聞き飽きるほどの時期であった1998年には、国内最高の人気種目である野球のプロ選手を含むドリームチームが構成されました。メジャーリーグ朴チャンホが出場し、日本を破って金メダルを獲得しました。兵役恩恵を受けた朴チャンホと金ビョンヒョンはメジャーリーグの舞台で活躍しました。当時の国民や選手たちにいわゆる「妹にも良いし義弟にも良い(訳注：両方とも得になって良いとのたとえ。ウィンウィンという意味)」のシーンでした。

しかし1998年バンコク大会以来、20年が過ぎた2018年の雰囲気は少し変わりました。いやたくさん変わったようです。まず、国民は過去のようにアジア大会に熱狂していません。ソウル大会直前の1982ニューデリーアジア大会で韓国のメダルは金28個であり合計100個になりませんでした(これも前の大会である1978バンコク大会での金メダル18個に比べると50%以上増えた数である)。この程度なら希少性と価値がありました。人々はメダリストを知って見て歓呼したし、アジア大会のメダルは文字通り一つの勲章でした。しかし、4年後のソウル大会で韓国は金メダルだけで93個をとりました。その前の大会の金・銀・銅メダルの合計に匹敵する数でした。以降の大会でも上下幅はありますが、それ以上のメダル数は一般の人が認知してカウントできるレベルを超えました。

私たちが過去にアジア大会で最も多く聞いていたアナウンサーやニュースのコメントがあります。「まさに不人気種目の悲しみを乗り越えて」です。そうです。オリンピックは少し大変だった時代にアジア大会を通じて選手たちは、年金や名誉そして男子選手たちの場合、兵役恩恵を得ることができました。総合競技大会であるだけに、普段、国民が見るのが難しい種目がほとんどであり、これらの不人気種目のアジア競技大会は、大きなチャンスでした。

ところが、あまりに多くなったメダルは、皮肉なことに不人気種目の悲しみから抜け出せないようになりました。水泳と陸上などまだアジアでもあまり競技力が高くない種目でのメダルは、たまに話題になりますが、すでにアジアの最頂上圏に上がったほとんどの種目では、国民やメディアに与えるインパクトや感動があまり高くなってしまいました。

アジア大会の価値が下落したもう一つの理由は、野球のような特定の人気種目の過度な関心にその原因があります。アジア大会野球にプロ選手の参加後、全体の関心の半分以上が野球に傾きました。アジア大会への関心が少しずつ停滞していった時に、プロ選手の参加は当時は良い活力の素であることは明らかでした。

しかし何でも越えると副作用があるものです。野球の金メダル1個への関心が他のすべての種目を合わせたほどの関心と呼んできて、結局、不人気種目の選手たちの悲しみを乗り越える場であり機会であったアジア競技大会は、彼らに大きな悲しみを与える状況になってしまいました。

さらに野球代表チームは、彼らの実際の意図とは関係なく兵役恩恵のための手段としてのみ認識されています(実際、野球といっても他の種目に比べて特に他の基準があるわけではない)。しかし、他のアジア諸国との競技力差と選手構成の面で、日本・台湾などと比較するとこのような気がするのもそれほど変ではありません。

2018ジャカルタ・パレンバンアジア大会はメダルを取っても関心を受けられない不人気種目や、メダル獲

得するかどうかに関わらず過度な関心と非難を受ける人気種目、どちらにとっても満足できない大会となっているのではないかと心配です。

大韓民国体育界がアジア大会、さらにオリンピックを含む各種の国際大会についてどう見て準備すべきか、新たな基準と哲学が必要な時期です。

<https://sports.news.naver.com/general/news/read.nhn?oid=009&aid=0004208223>

03 ソウル新聞 2018.8.31 【 “メダル立役者だけ信じて”...予告された墜落 】

’ エリート体育と生活体育の間に道に迷って’

ややマイナスの話ではありますが、来月 2 日に幕を下ろすジャカルタ・パレンバンアジア大会が私たちに認識させた赤裸々な今の位置ではないかと思えます。韓国選手団は大会閉幕を三日後に控えた 30 日（韓国時間）午後 9 時 30 分までに金 38、銀 46、銅メダル 55 個に、先頭の中国は言うまでもなく、2 位の日本（金 57、銀 49、銅 64 個）との格差がさらに広がり、4 位開催国インドネシア（金 30、銀 23、銅 37 個）からも追われる身となりました。

4 年前の仁川大会で韓国は金 79、銀 70、銅 79 個で何と 228 個のメダルをとり、日本（金 47、銀 76、銅 76 個）を圧倒しましたが、4 年ぶりに正反対になる局面です。

いろいろ理由はあるでしょうが確実なメダル取得種目が消えました。伝統的な貢献種目のテコンドーとアーチェリーの不振が大きかったです。テコンドーは 17 個の金メダルのうち 5 個にとどまり、アーチェリーは目標（7 個）に大きく及ばない 4 個にとどまりました。柔道は初日の 29 日だけで金 2、銀 1、銅 1 個を獲得し来月 1 日までに多くの金メダルが残っていますが、日本を覆すほどではないようです。

その上、基礎種目の水泳と陸上などで中国と日本に大きく遅れをとりました。中国は水泳競泳で 50 個、陸上で 31 個のメダルを総なめにしました。看板の孫楊（27）（訳注：孫楊、スン・ヤン、水泳男子自由形）が 4 冠と健在だったし、世代交代もスムーズにできシュイジャイ（23）（訳注：徐嘉余、シュー・ジアユ、背泳ぎ）とワンジェンザホ（16）（訳注：オウ・カンカカ、女子自由形）がそれぞれ 5 冠王と 4 冠王になりました。伝統武道である武術太極拳でも 14 個の金メダルのうち 10 個を席卷しました。

あまりにも生活体育の土壌が硬いうえ、2020 年の東京オリンピックを控えて投資をいとわない日本も水泳で 52 個、陸上で 17 個のメダルを集めました。18 歳女子高生「新星」池江璃花子は 6 冠王に銀メダル 2 つを加え、大会最優秀選手（MVP）が有力です。

韓国は 100 個を超える金メダルがかかった二種目でそれぞれ一つずつしか取れませんでした。伝統的に強い球技が準決勝や決勝に大勢上がっているが、日本との格差を縮めるには力不足に見えます。むしろ開催利点を存分に享受するインドネシアに追い越される心配をしなければならない事態です。

事実、スポーツ界では生活体育の土台の上にエリートスポーツを再び本格強化した日本に追い越されるのは時間の問題だという認識が広まってから随分経ちます。今回の大会を通じて、その現象を視覚的に確認することになっただけという話です。私たちは、まさに韓国体育界が生活体育と統合された後、調整期を迎えています。

スポーツ公正委員会委員であるチェ・ドンホ、コラムニストは「エリート体育と生活体育を管掌する大韓体育会の内部管理でも水と油のように混ざらず別々に分れるという話が続くが、現場ではいかがなものか」と反問した。続けて「日本は生活体育の底辺をがっちりした後にエリートスポーツにもう一度関心を持ち始め

た。日本の高校野球チームは 5000 あるが私たちは 70 に過ぎない。日本の高校生選手たちは勉強しながら運動を並行する。このようなしっかりとした底辺の上に社会人野球選手でアジア大会代表チームを作ることができる」と指摘しました。

スポーツ界ではアジア大会の成績が良くないという理由で生活体育の育成に手をつけようとするのも望ましくないという意見が多いです。チェさんは「相乗効果が出ないというだけで今、後退したらいけない。長期的には正しい方向だ。統合の趣旨を生かし、相乗効果を出せるようにシステムを整備しなければならない」と強調しました。

<https://sports.news.naver.com/general/news/read.nhn?oid=081&aid=0002939840>

INFOMATION

体育市民連帯 ソウル市 瑞草区 瑞草洞 1485-3 スンジョンビル 305 号

체육시민연대 서울시 서초구 서초동 1485-3 승정빌딩 305 호

Tel : 02-2279-8999、E-mail : sports-cm@hanmail.net

ホームページ : <http://www.sportscm.org/>

日本語訳 : 佐藤好行 新日本スポーツ連盟 国際活動局 韓国担当 jrlfgep@jarl.com